

世界に伝える、未来につなげる

多摩市立東愛宕中学校 3年 能美 愛絆

私は、広島への原爆投下で、私と同じ中学生がたくさん亡くなったと知った。親元を離れて懸命に働いていた中学生たちが、いきなり落とされた一発の原爆のせいで家族に再会できないまま亡くなったと聴き、胸が痛くなった。

資料館では、原爆によって亡くなった子どもたちの遺品や、それを大切に保管していた家族の言葉を見ることができた。被爆当時着ていた服や大切に持っていた宝物が、爆風や熱線でボロボロになってしまったことが、現物を見ることではっきりわかったと同時に、それらの遺品を大切にとっておいた家族の愛情を感じられた。被爆体験講話では、体験をもとに描かれた絵を見ながらお話を聴いたので、ひとつひとつのお話が心に残った。中でも、『人の遺体を踏むことになってしまって、何も感じなくなっていった。人間の感覚を失ってしまっていた』という話がとても印象に残っている。まだ、中学生の女の子がそんな経験をしてしまったということ、私はこの被爆体験講話を聴かなければ一生知ることがなかっただろうし、想像もしなかっただろう。

現在の平和な日本で生まれ育った私たちは、戦争を経験したことがなく、戦争をどこか非現実でこれからも経験することがない、過去の出来事と思いがちである。だか、現在の世界情勢を考えると、いつ日本が戦争に巻き込まれてもおかしくはないのだ。実際に戦争や紛争で罪のない一般人が犠牲になっている国もある。

それを止めるためには、やはりヒロシマの悲劇を世界に伝えていく必要があると思う。私は部活動で、アゼルバイジャンの中学生とやりとりをしたことがある。ちょうどその時期、アゼルバイジャンは他国との戦争で勝利を収めたようで、現地の中学生は皆、それを喜んでいて。私たち部員は、戦争をして相手国に勝利したことを喜んでいてことに違和感を覚えた。被爆国であり、敗戦国である日本で育った私たちは、戦争は悪であると教育されていて、戦争の残酷さを知る機会が多いからだろう。海外では、アゼルバイジャンのように、戦争をして勝利することが自国の平和のためには必要不可欠であると考える国もあるようだ。

だが、海外の人に戦争の残酷さや平和の大切さを伝えるのが難しいというわけではないと思う。現在は技術も進み、兵器の威力も増していると聞くが、離れている場所の知らない相手にも情報を伝えられるツールも発展している。それに、広島市にはたくさんの海外の方が訪れていた。子供と一緒に資料館を見ていた家族連れもいたし、慰霊碑に手を合わせている方もいた。現在の広島市が綺麗で落ち着いているのは、平和を願う人たちの気持ちの表れなのだと思う。その気持ちは、きっと日本人だけでなく、世界中の人たちの気持ちの表れだろう。

中学生の私がいきなり大きなことをするのは難しいけれど、まずは周りの人に広島で知ったことを話していきたい。被爆を体験した世代が減り、戦争や核兵器に対する実感が薄れていく中、被爆者の思いを後世へ語り継いでいくのが私たちの役目だと思う。今の平和に感謝しつつ、平和を繋いでいけるように戦争について学び続けたい。人間は間違える生き物だが、そこから成長しなくてはならないと思う。No more Hiroshima ! No more Nagasaki ! No more Hibakusha ! この思いが、世界の平和に繋がってほしい。